

[最近のトピックス]

頸部聴診における咽喉マイクの有効性

廣瀬 知二

伊東歯科口腔病院

摂食嚥下障害の正確な評価として、嚥下造影検査 (videofluoroscopic examination of swallowing : VF) または嚥下内視鏡検査 (videoendoscopic examination of swallowing : VE) が用いられる。しかし、嚥下障害が疑われるすべての症例にVEやVFを行うことは必ずしも容易ではない。そのため、摂食嚥下障害の診断目的に各種のスクリーニング検査が行われることも多い。

頸部聴診法は食塊を嚥下する際に咽頭部で生じる嚥下音ならびに嚥下前後呼吸音を頸部より聴診し、嚥下音の性状や長さおよび呼吸音の性状やタイミングを聴取して嚥下障害を判定する方法である。非侵襲的にベッドサイドでスクリーニングできることから、在宅や施設入所要介護高齢者の嚥下状態モニタリングに適している。

咽喉マイクは、騒音の中で話し声はマイクが音割れする問題を解決するため開発されたものである。空気の振動を拾わない為、周囲にノイズがあっても明瞭度が確保されるので消防隊が火災現場において、活動中に使用する通信システムにも採用されている。

摂食嚥下障害の現場で多職種複数の検査者で頸部聴診を行う場合には咽喉マイクを応用すると有効である (図1, 2) (大宿, 2014)。頸部聴診専用の製品も開発されているが、咽喉マイクと拡声器が比較的廉価で入手できるので組み合わせることも容易である。この方法を用いると聴診器の固定にともなう患者の負担は少なく、また検査者はハンズフリーとなるので、喉頭の触診や食事介助を同時に行うことができる。音声レコーダに接続すればデータの記録が可能であり、さらに音響学的解析への途も開ける。

参考文献

大宿茂：頸部聴診法。老年歯科医学。28。331 - 336。2014



図1 咽喉マイク (南豆無線電機社製)。



図2 頸部にマイクが密着するように装着する。